受験番号

二〇一六年度　A日程午後

国語　その一

一　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。

本文1～9は形式段落番号です。（設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。）

1　メダカは誰でも知っているし、また小さくて愛らしい魚なので、「メダカのa生息地がなくなる」というと、保護しよう、飼育しようということになる。そのことを否定するものではない。しかし A も忘れないでほしい。メダカの飼育はそれほど難しくはない。小さな容器でも、たまり水でも、生きて代を重ねることができる。しかしメダカと同じ環境にくらす生物が、皆そのように簡単に飼育できるわけではない。

2　ホタル（ゲンジボタル）も各地でそのようにして保護されてきた。少なくなった発生地を守ろうと、保存会が結成され、発生地を保全し、①公園化されたところもある。②皮肉なことに、その結果ホタルが減少したところも少なくないのだ。発生時期にはホタルの鑑賞会が開かれるとなると、ホタルがいなくては話にならないので、幼虫の餌のカワニナ（※淡水にすむ巻き貝）を育てるために水路にキャベツをまくといった話から、カワニナを放流する、あげくはホタルを養殖し、幼虫を放流することまで行われるようになった。ここにはホタル以外の生きもの、トータルな生態系への視点は見られない。これは野生生物のペット化であって、自然保護や生態系の保全とは大きくかけ離れている。

3　考えてみてほしい。かつての水田や※谷戸でホタルが発生していたのは、そのようにb意図していたからではない。米づくりのために田を耕し、水路を管理していたことが結果的に適度な※かく乱となり、ホタルの発生にとって都合のよい環境が保たれた。そもそも人里の生きもの（農業生物）は全てそのような条件に適応して、絶妙なバランスの中で生きのびてきたのである。

4　これはメダカにとっても同じである。

5　私はあえて言う。「メダカを保護してはいけない」と。メダカだけを保護するのでなく、メダカのいる環境を保全し、あるいは復元しなければ、ほんとうにメダカを守ったことにはならないからだ。

6　恐れるのは③メダカだけに目がいってしまい、その環境にいる他の多くの生きものがないがしろにされることである。メダカだけを守ろうとすれば、庭の池で飼うのと大差はない。一部ですすめられているように、水族館や淡水魚飼育センターのような施設でc希少淡水魚を飼育保存することも、最終手段としてやむを得ない面もあるが、それを目的にしてはならないことを強調しておきたい。研究施設の水槽におさめ、あるいは遺伝子を冷凍保存すれば、種を保全したことになるとは、私には思えないのである。人間と自然との関わりを教えてくれるのは、さまざまな生きものとのつながりあっている野にすむメダカなのだ。

7　環境や生きもののつながりへの意識を持ち、野外での継続的な生息と復元をめざすことがまず重要だと思う。そのためには、やはり第一に、メダカが生息している環境をそのまま保全することを考えなければならない。次にはそこを「どのように」保全するかだ。人里の生きものは人間も含めたつながりの中で守られてこそ、ほんとうの意味で生きていけるからである。

8　メダカを含めて、水田とその周辺を生息地とするありとあらゆる動植物を保存しようとすれば、かなりの面積を使いほぼ同じ条件の環境を用意しなければならない。そして④その環境を維持していこうとするなら、相当な労力と資金を必要とするだろう。

9　たとえば水田地帯の一部に伝統的な水田環境を復元し、野外博物館のように保全することはそれほど難しいことではないに違いない。しかし、行政が税金を使って、あるいはボランティアの力によって維持していくだけでは、d前述したホタルの例のように、どこかで行きづまると思われる。水田生態系とその広範なネットワークをよみがえらせるには、健全な生態系によって生産力が維持されていくしくみが必要なのである。水田は米を生産するだけの場所ではないが、水田の目的はやはり米を生産することだからだ。メダカの生息のために米を作るのではなく、⑤米を作り続ける中でメダカが生きていけるしくみを築いていかなければならない。

（小澤祥司『メダカが消える日』）

※淡水…塩分濃度のきわめて低い水。
※谷戸…丘陵地が削られて作られた谷状の土地。谷間。
※かく乱…かき乱すこと。

問1　a～dの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

a [　　]　b [　　]　c [　　]　d [　　]

問2　A について、作者はどのようなことを忘れないでほしいと言っていますか。その説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　その環境にメダカが十分に適応する能力があること
イ　その環境にはメダカ以外にも多くの生物が生息していること
ウ　その環境にメダカと人間が共に生きていること
エ　その環境ではメダカを自然に帰せないこと

[　　]

問3　――①「公園化」と同じように、発生地（生息地）を人工的に守る方法として示されていることを、形式段落7～9の本文中から十五字で抜き出しなさい。

[　　]

問4　――②「皮肉なことに」とは、どのようなことを指して言っていますか。それを説明した左の文の（A）～（C）に入ることばを、指定字数で本文中から抜き出しなさい。

・ホタルを（A　二字）しようとした活動が（B　三字）にホタルを（C　二字）させたこと。

A [　　]　B [　　]　C [　　]

問5　――③「メダカだけに～される」とありますが、考え方にどのようなことが欠けていると、こうなりますか。本文中から十二字で抜き出しなさい。

[　　]

受験番号

二〇一六年度　A日程午後

国語　その二

問6　――④「その環境」とは、どのようなことを指していますか。本文中のことばを使って、四十字以内で答えなさい。

問7　――⑤「米を～いかなければならない」とありますが、どのような事実に基づいてこのように述べていますか。その説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　米づくりのために環境を整えたことで、ホタルの発生に都合のよい環境が保たれたという事実。
イ　米づくりのためだけに環境を整えていたのでは、ホタルが減少してしまうという事実。
ウ　ホタルのために環境を整えたことで、米づくりの環境も整えられたという事実。
エ　ホタルのためだけに環境を整えていたのでは、米づくりの環境が整えられないという事実。

問8　筆者が、ホタルの保護活動を批判的に述べている表現があります。その表現を、本文中の形式段落[1]～[5]から九字で抜き出しなさい。

二　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。（設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。）

少年は、いつからとなく、もう長い間のぼっていかなかった※背山の尾根に、①女の子をつれていってやりたいという思いにさそわれていった。そこは春の日差しが金粉をまいたように[A]とかがやいているにちがいなかった。

少年は、※萌えでた山肌の緑に寝ころんだり、尾根の松の木にのぼったりしている女の子を心に描いているのだった。港の町並が見え、とろんと凪いだ港が見える。港には、白い美しい外国船が幾隻も幾隻ももやっていて、水すましのように小蒸気がその間をぬってすべっていく。少年には、女の子が手をたたいてよろこんでいる姿が見えるように思えた。

ある朝、少年は、目覚めるなり、

「山へ登ろうよ。」

と女の子に言った。

「山へ登るの。」

女の子は少年に問いかえすように言ったが、少年が、

「②うん、山や、裏の山や。松の木に登って、港を見ようよ。」

とせきこんで言うと、女の子はしばらく少年を見つめていて、やがて、

「うち、山なんか登ったことあらへん。」

と、許しを請うように、[B]と言った。女の子は足がa悪くて山に登ることができなかったのだ。だが、かがやいていた少年のまなざしが、みるみるくもっていくのを見ると、

「※ぼんは、山へ登りたいの。」

と言った。それから、

③「ぼんが登りたいんなら、うち、行ってもええで。」

としょんぼり言った。

女の子は、裏木戸を出て崖肌にかかるところで、もう、まがらない右足を手でbかばいながら、やっと少年のあとを[C]と追っているのであった。少年は、はじめ、そんなことに気づかなかった。女の子に少しでも早く尾根からの景色を見せたくて、一人で先に駆け登って行った。女の子も自分と同じように駆け登って来るように、少年は思っていたのだ。だが、二つ三つ、まがり角をまがってから、女の子の姿が見えないことに気づいた。

「はようおいでよ。」

大きな声でそう言って、それから。不安になって、あとへ駆けもどって行くと、女の子は、最初のまがり角をやっとまがりおえて、右足をひきずりながら懸命に登って来ていた。色のあせた※メリンスの着物のひざぎりの裾から、真っ直ぐつっぱっている右足が見えた。そんなことは、毎日いっしょにいて、とっくに知っていたのだが、少年は、その時、はじめてそのことに気づいたように思った。少年が女の子のそばまでもどって行くと、女の子はいっそう懸命に足をひきずりながら、

「うち、のろくってかんにんな。」

と言った。④女の子は、せいいっぱいに笑いを頬にうかべようとしていた。そばかすが汗ばんでいる目のまわりにういてきていた。少年は、それが女の子の泣き出す前の表情であることを、知っていた。少年には、女の子の大きな黒い目から、今にも[D]と涙がこぼれ落ちそうに思えたが、女の子はうれしそうに、にっこり笑ってみせて、

「ぼん、はよ、行こ。」

と言った。少年は、そうすれば女の子が歩きやすくなるなどということは考えてもみずに、女の子の右肩へ自分の左肩をよせていって、女の子のからだの重みを自分で支えた。もう少年は尾根まで登ることはあきらめていた。だが、ついそこまで登れば、目の下に、港の町の黒い瓦屋根の並んだ町並や、いっぱいに汽船がうずまった港が見おろされるところがあることを思い出していた。せめて、そこまで、少年は、女の子を連れて行きたかったのだ。少年が、やっと女の子をその山肌まで連れて行くと、女の子は、

「わっ。」

とさけんで、日だまりへとびだして行った。女の子はすぐころんで、メリンスのd着物には芝草がまみれたが、そんなことはどうでもいいように、女の子は、

「うち、こんなとこ来たん、はじめてや。」

とさけぶように少年に言った。女の子のからだいっぱいに春の日ざしがこぼれていた。

（田宮虎彦　『小さな赤い花』）

※背山の尾根…一対の山を男女に見立てた場合の、男性にあたる山の峰のつづき。
※萌えでた…植物が芽ぶいた。
※ぼん…男児に対する愛称。
※メリンス…うすくやわらかい毛織物。

問1　――①「女の子をつれていってやりたいという思いにさそわれていった」とありますが、少年はどのようなことを未来に思い描くため、このような気持ちになっているのか。本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

受験番号

二〇一六年度　A日程午後

国語　その三

問2　A〜Dに適することばを、次のア〜カから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア おどおど　イ ぽたぽた　ウ スタスタ
エ ぶつぶつ　オ のろのろ　カ キラキラ

A □　B □　C □　D □

問3　――②「うん、山や、裏の山や。松の木に登って、港を見ようよ。」ということばを、少年はどのような口調で話したと考えられますか。その説明として最も適切なものを、次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア ゆっくりと、言い聞かせるような口調。
イ 弱々しく、相手にお願いするような口調。
ウ 勢いよく、たたみかけるような口調。
エ 大声で、怒りを表現するような口調。

□

問4　═a「悪く」、b「かばい」、c「不安に」、d「着物」の品詞名を、次のア〜オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 形容詞　イ 名詞　ウ 連体詞
エ 動詞　オ 形容動詞

a □　b □　c □　d □

問5　――③「『ぼんが…言った」とありますが、この時の女の子の気持ちを「希望」ということばを使って、三十五字以内で答えなさい。

□

問6　――④「女の子は、せいいっぱい笑いを頬にうかべようとしていた」には、女の子のどのような気持ちが表れていますか。その説明として最も適切なものを、次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア 少年に足のことをこれ以上話したくないという気持ち。
イ 少年を困らせている自分自身を許せない気持ち。
ウ 少年の歩く速さについていけない自分にイライラする気持ち。
エ 少年によけいな心配をさせてはいけないという気持ち。

□

問7　山を登り、そこからの景色を見た女の子の感動を、情景描写によって表現している一文を、文中から抜き出しなさい。

□

問8　少年は、どのような人物として描かれていますか。その説明として最も適切なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア 他人に対する優しさを持ちながらも、自分の考えを通そうとする意志の強い人物。
イ 他人の不自由を気づかいながら、明るくのびのびふるまおうとするおおらかな人物。
ウ 他人の優しさによって、自分のわがままに気づき、もっと素直に生きようと深く考える人物。
エ 他人をいたわり、互いに喜びを分かち合おうとすることができる思いやりのある人物。

□

三　次の①〜⑤の慣用句の（　）に当てはまる身体の一部を示す漢字を、後のア〜カから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

①（　）が滑る　②（　）が抜ける　③（　）が高い
④（　）をのばす　⑤（　）を長くする

ア 歯　イ 口　ウ 腰　エ 首　オ 足　カ 鼻

① □　② □　③ □　④ □　⑤ □

四　次の①〜④の（　　）に適することばを、それぞれ三字で答えなさい。

① 私の姉はまるでアイドルの（　　）かわいい。　□
② たぶん明日は、晴れになる（　　）。　□
③ もしも留学する（　　）、カナダに行きたい。　□
④ どうかすばらしい年になります（　　）。　□